

生誕100年三島由紀夫のルーツを探る

Shiko-no-Mori Special Exhibition Nov. 2025 "Exploring the Roots of Yukio Mishima: Centennial of His Birth"

会期: 2025年11月11日(火)~12月26日(金) 場所: 中央図書館「思考の森」展示コーナー

20世紀日本文学を代表する作家の一人、三島由紀夫の母方のルーツが金沢にあることをご存じでしょうか? 生誕100年の節目の年に開催する本展では、「加賀藩の漢学者・橋家」「学習院時代の三島由紀夫」「若き日の読書」という3つの視点から、作家・三島の源流を附属図書館の所蔵資料等からたどります。

三島由紀夫 (みしま ゆきお、1925(大正14)~1970(昭和45))

小説家、劇作家。東京出身。本名平岡公威(ひらおか きみたけ)。東京大学法学部卒。古典主義的な緻密な構成と華麗な文体で独自の様式美を備えた文学世界を展開。晩年、唯美的なナショナリズムに傾斜し、自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自殺を遂げた。小説「仮面の告白」「潮騒」「金閣寺」「豊饒の海」「美しい星(金沢が舞台の一つ)」、戯曲集「近代能楽集」など。(参考: 日本国語大辞典)

【展示資料解説】

ルーツ1 加賀藩の漢学者・橋家

#1 卯辰山開拓録 / 開拓山人著. 出版者不明, 1869(明治2)頃【特別資料室】

三島由紀夫の母方の曾祖父・橋健堂(1822(文政5)~1881(明治14))は加賀藩の漢学者で、卯辰山養生所(1867(慶応3))に卯辰山に作られた病院。金沢大学の前身の一つ)に隣接する集学所と呼ばれる平民子弟を対象とした教育施設で習字を教えていた。この本では明治前期の卯辰山の開拓の様子を絵図を交えて紹介している。



※国立国会図書館デジタルで全文閲覧可 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1885673>

#2 金沢市教育史稿 / 石川縣教育會金澤支會編, 1919(大正8)【師範蔵書 060:317】

大正時代に編纂された、金沢市の学校等の教育施設や教育関連の人物をまとめた資料で、集学所や橋健堂の項目もある。健堂については、明治維新以降の活動が紹介されている。健堂の後をついだ養子の橋健三(1861(万延2)~1944(昭和19))は廃藩置県後上京。後に開成中学校長となり、娘・倭文重(しづえ)(1905(明治38)~1987(昭和62))が平岡家に嫁いでいる。

#3 三輪 安宅 東北 錦木 雲林院(寶生正本18). 江島伊兵衛, 1893(明治26)【中央図書庫 768.4:H825:18】

三島の母方の祖母・橋トミは観世流の謡を習っており、三島が中学1年生の時、初めて観能に誘った。その時に鑑賞した演目が「三輪」である。「三輪」は天岩戸神話を題材とした演目で、晩年の『豊饒の海』第2部『奔馬』には奈良県の三輪神社が登場している。若き日から親しんだ能とかねて好きだった作家・郡虎彦(こおりとらひこ、1890(明治23)~1924(大正13))の作品にヒントを得て、1956(昭和31)年、三島は能を近代劇として翻案した『近代能楽集』を発行している。展示資料は当館所蔵の明治時代に発行された宝生流の謡本の正本である。

#4 日本橋 / 泉鏡花著. 千章館, 1914(大正3)の日本近代文学館による復刻版

三島の父方の祖母・夏子(戸籍名: なつ、1876(明治9)~1939(昭和14))は、泉鏡花(1873(明治6)

～1939（昭和 14）の熱烈なファンで初版本を収集していた。幼少時から鏡花本に接していた三島は鏡花を高く評価し、蔵書中にも多数の鏡花作品が含まれていた。その中の一つ、1914（大正 3）年、千章館から出版された『日本橋』は小村雪岱（こむら せつたい、1887（明治 20）～1940（昭和 15））の装丁でも知られている。

ルーツ 2 学習院時代の三島由紀夫

#5 学習院一覧（昭和 16 年 9 月）／学習院編、1941（昭和 16）【特別資料室】

三島由紀夫（本名「平岡公威（きみたけ）」、1925（大正 14）～1970（昭和 45 年））は、1931（昭和 6）年学習院初等科に入学後、1944（昭和 19）年に中等科を卒業するまで学習院に在籍していた。

展示資料は、三島 16 歳（中等科 5 年）の時のもので、恩師・清水文雄や松尾聰の名前も掲載されている。ちなみに初等科 2 年のページには、上皇（明仁親王）の名前も掲載されている。

※国立国会図書館デジタルで全文閲覧可 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1460719>



#6 和泉式部日記／清水文雄校訂（岩波文庫）．岩波書店、1941（昭和 16）【中央図文庫・新書 I915.34:I99】

三島の才能を見出し、生涯の師となったのが、学習院教授（国語）、清水文雄（1903（明治 36）～1998（平成 10））である。清水は和泉式部の研究者として知られており、三島を日本古典の世界に誘った。展示資料は清水が校訂を行った岩波文庫版の『和泉式部日記』である。

#7 尾上本濱松中納言物語／尾上八郎、松尾聰編．春陽堂書店、1936（昭和 11）【四高蔵書 7:24:203】

松尾聰（1907（明治 40）～1997（平成 9））は学習院教授（国語）で、『浜松中納言物語』の研究者として知られている。この物語は菅原孝標女の作とされる。三島は晩年の四部作『豊饒の海』第 1 部『春の雪』の末尾でこの作品について、「『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語」と書いている。

#8 花ざかりの森／三島由紀夫著．七丈書店、1944（昭和 19）（初版本）【個人蔵】

三島が学習院中等科時代に書いた小説。学習院の恩師・清水文雄の推薦で同人誌「文芸文化」に 1941（昭和 16）年に連載されたものが初出である。「三島由紀夫」のペンネームもこの作品から始まる。このペンネームは、学外の雑誌への発表に際して、清水と三島が相談して決めたもの。展示本はこの作品を含む、三島初の単行本の初版本。学習院中等科を首席で卒業し、東京帝国大学法学部に入学する直前、三島 19 歳の秋に、凝った贅沢な装丁で出版された。

ルーツ 3 若き日の読書

#9 サロメ／オスカー・ワイルド作；佐々木直次郎訳（岩波文庫）．岩波書店、1936（昭和 11）【中央図文庫・新書 I932:W672】

英国の作家・オスカー・ワイルド（1854～1900）の戯曲。10 代の三島が好んで読んだ本で、「私がはじめて手にした文学作品」「はじめて自分の目で選んで自分の所有物にした本」と自ら書いている。三島の蔵書目録には戦前の岩波文庫版（訳者の佐々木直次郎は金沢大学の前身の四高出身で、在学中「北辰会雑誌」に文章を書いている）が含まれている。三島は日夏耿之助（ひなつ こうのすけ、1890（明治 23）～1971（昭和 46））訳を好んでおり、1960（昭和 35）年この訳により、自らの演出で上演（文学座）している。

#10 ドルジェル伯の舞踏会／レーモン・ラディゲ著；堀口大學訳（白水社世界名作選）．白水社、1952（昭和 27）【暁鳥文庫 A953:R129】

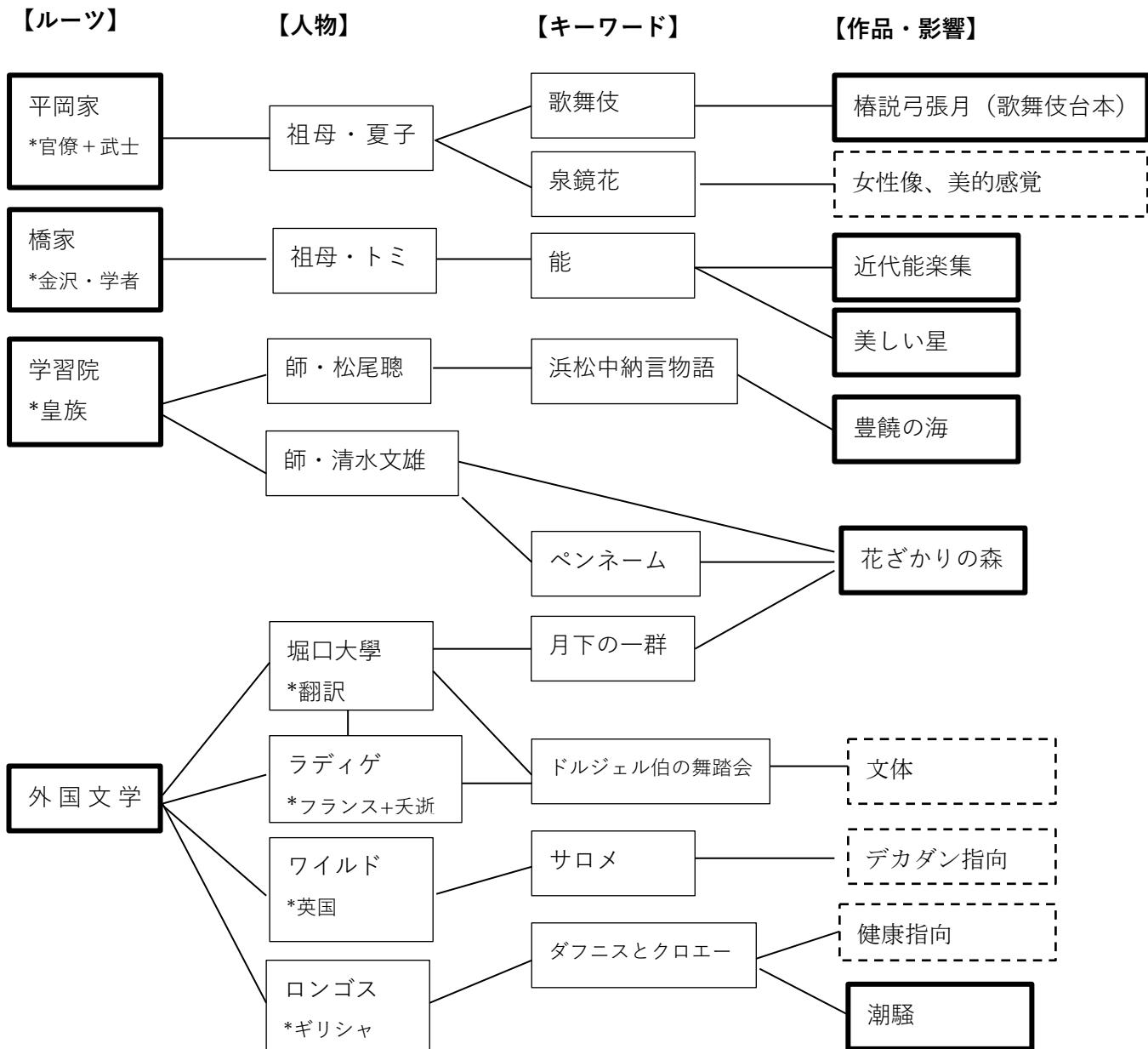
フランスの作家・レイモン・ラディゲ (1903~1923) の小説。10代の三島が好んで読んだ本で、「完全にイカれてゐた（略）それはまさに少年時代の私の聖書であった」「私も何とか二十歳前にこんな傑作を書き、二十歳で死んだら、どんなにステキだらうと思ってゐた」と自ら書いている。三島は堀口大學 (1892 (明治 25) ~1981 (昭和 56)) 訳で読んでおり、文体面でも大きな影響を受けた。展示本も堀口訳だが、戦後に再発売された暁鳥文庫所蔵のものである。

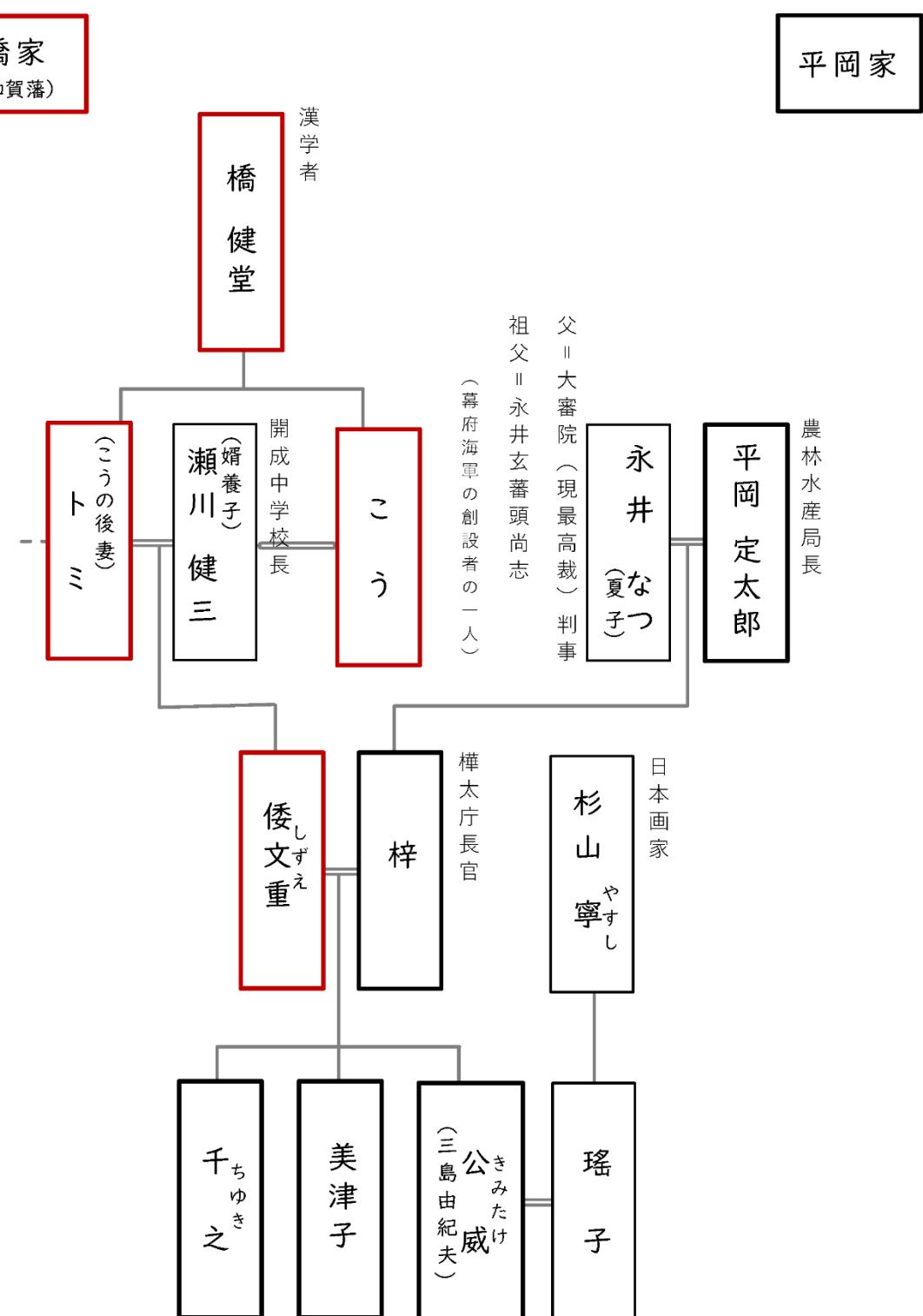
#11 月下の一群 / 堀口大學訳. 第一書房, 1925 (大正 14) 【暁鳥文庫 A951:H811】

三島由紀夫名で初めて出版された小説『花ざかりの森』の巻頭句ではシャルル・クロスの「小唄」という詩を引用している。その詩を含む、堀口大學による訳詩集が『月下の一群』で、当時の若い詩人に大きな影響を与えた。展示本は暁鳥文庫所蔵のもの。装丁・用紙ともに、当時としては異例な豪華本となっている。

#12 ダフニスとクロエー:牧人の恋がたり / ロンゴス著；呉茂一訳. 養徳社, 1948 (昭和 23) 【暁鳥文庫 A991.3:D212】

三島の代表作の一つ『潮騒』の原型となった2~3世紀ギリシャの戯曲。三島は戦後ギリシャへの関心を高め、昭和27年の世界旅行の中でギリシャを訪問している。三島はその頃この本の訳者でもある呉茂一 (1897 (明治 30) ~1977 (昭和 52)、当時東京大学教養学部教授) の授業を聴講し、ギリシャ語の勉強も行っている。展示本は暁鳥文庫所蔵のもので、三島の蔵書中にも同じ本が残されている。





三島由紀夫関連家系図 ※省略して記載しています。

【参考文献】長谷川泉ほか編『三島由紀夫事典』明治書院, 1976／松本徹, 佐藤秀明ほか編『三島由紀夫事典』勉誠出版, 2000
／島崎博, 三島瑠子共編『定本三島由紀夫書誌』薔薇十字社, 1972／佐藤秀明, 山中剛史, 久保田裕子編『三島由紀夫書誌』日
外アソシエーツ, 2025／平岡梓『倅・三島由紀夫』文芸春秋, 1972／三島由紀夫『私の遍歴時代』講談社, 1964

【読んでみよう】佐藤秀明『入門講座三島由紀夫：31作品の勘どころ』(平凡社新書) 平凡社, 2025／三島由紀夫.新版(別冊太陽).平凡社, 2025／四方田犬彦『三島由紀夫を見つめて』ホーム社, 2025／杉山欣也『「三島由紀夫」の誕生』翰林書房, 2008